私の短歌

蒼天

金子公宥

本歌集は、私の恩師(金子先生)が十年にわたり全国短歌大会に投稿して入選した短歌(特選・秀作を含む)161首を収録したものです。

編集・装丁　藤田英和

目　次

空を測る　……3
夜空の星　……8
ふるさとの富士　……12
ベルリンの壁　……17
無人バス　……22
テトラポッド　……26
私はポスト　……30
沈むベネツィア　……34
盆栽の松　……39
散歩の道　……43
時代は変わる　……49
愚かな人類　……53
未来を生きる　……58
ミモザの香　……62
植物の心　……67
就活のとき　……71

空を測る

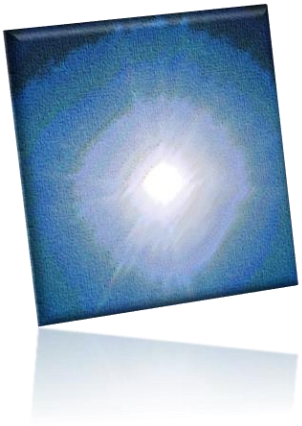
晴れた日の空の広さを測ること

飛行機雲がまっすぐ伸びる

天空に光かがやく日暈(ひかさ)こそ
「日輪」の名にふさわしきかな

きんきんと音なく冴(さ)ゆる凍(い)て空に
ナイフのごとき三日月ひかる

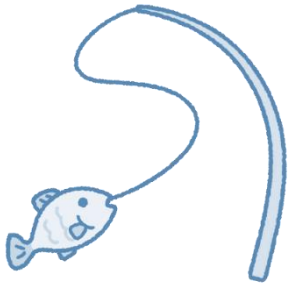
蒼天に点となりたるジェット機の
飛行機雲が瀬戸内わたる



旋回するわがジェット機の窓外に
銀河の東京傾きて見ゆ

風のなぐ鏡のごとき海面に
釣り人一人まき餌(え)を投げる

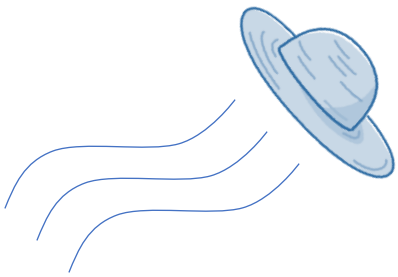
もがきつつ釣り上げられしワカサギが
氷を枕に転(ころ)びておりぬ



ジム帰り薄雲かかる太陽が
目玉焼きに見ゆ空腹なれば

雨上がり雲の裂け目に顔を出す
光の束が生駒(いこまと)嶺を刺す

自動車の急ブレーキを聞くような
春一番に帽子がぶっ飛ぶ



たこ焼をころころ回すオジサンの
手元に踊る千枚通し

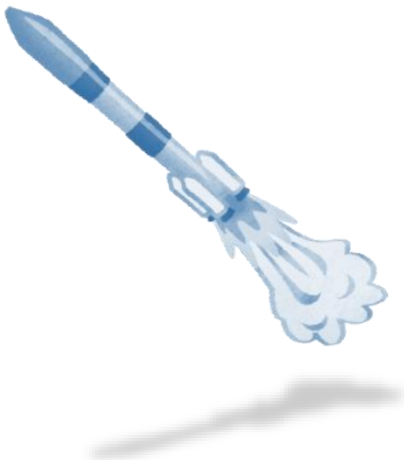
マンションの前の畑（はた）すく老人の
野良着と地下足袋ピッタリ似合う

風吹けばピューリピュララと聞こえくる
窓の隙間が笛となるらし

夜空の星

民間のロケット打ち上げ成功に

夜空の星がまた一つ増ゆ



「人類の肺」と言われるアマゾンの
ジャングルありて我らは生きてる

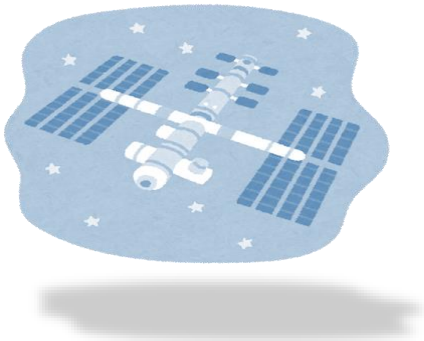
われわれは地球とともに回ってる
時速にすれば千数百キロ

病室の窓のガラスに音もなく
流れる雨滴（うてき）は静脈のごと

大空にさえずる声を残しつつ
急降下する落雲雀（おちひばり）かな

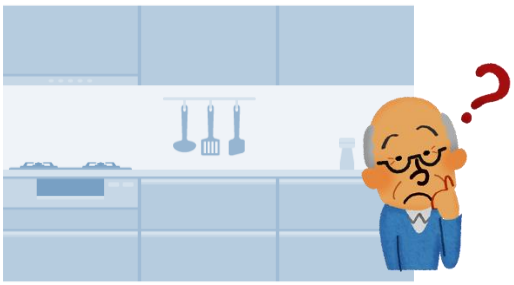
リュウグウの岩を持ち来るハヤブサの
宇宙の謎解き令和につづく

サクラ見のござに敷かれし小半日（こはんにち）
じっと耐えてる雑草たちは



キッチンへ何しに来たのと問われても
思い出せないハナイチモンメ

大空のヒーター故障したような
冷えた風吹くなにわの街に



ふるさとの富士

晴れた日の人無き浜の白砂に

枯れ木で描くふるさとの富士

田植えする大勢の人に追われつつ
代かき(しろ)をせし郷里(ふるさと)の水田

田植期の馬のからだは泥だらけ
小川に連れ行き洗いし夕べ

ふる里の天城の山の名物は
ワサビの香りと浄蓮の滝

我が窓の眼下にひろがる田畑(でんばた)に
　種まく農夫のてつきあざやか

夜遅く灯(あ)かりをつけて壁を塗る
　左官の鏝(こて)がキラリと光る

今日もまた人口知能のパソコンに
　多くを尋ね一日(ひとひ)を終える

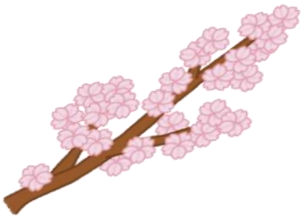
行商の荷を負い母は働きぬ
戦地に散りし父に代わりて

入学し最初の二ヶ月バイトする
学問よりも生きるが先と

パーティーの幹事をすれば必ずや
足を出すわが金銭感覚

銀杏（ぎんなん）を拾って干して煎（い）りたれば
遠きふる里の香りがしたり

真夜中の間違い電話は聞き馴（な）れた
友の声なれ受話器を戻す



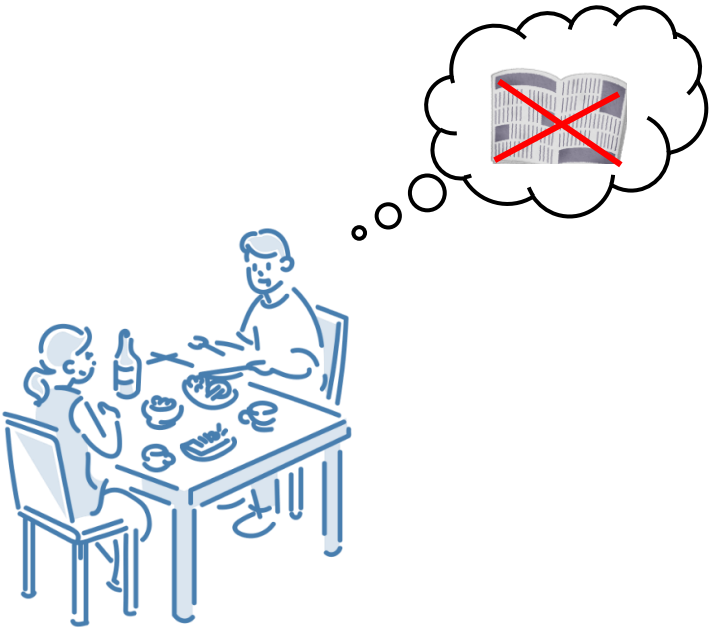
ベルリンの壁

ベルリンの壁の跡には桜だと

平和主義者の友は語りぬ

きっとまた妻は言うだろう食卓で

新聞読むなと退院し来れば



花よりもビールが先と栓を抜く
その手の甲に花びら一つ

妻の目を盗んで飲む酒うまい酒
夜中にこっそり楽しむひとり

この魚どこを泳いでいたんだろう
お節(せち)の中のゴマメと目が合う

夏の日の土用の丑にウナギ食ぶ（た）
万葉人もそうしたらしい

茄子きうり不揃いなのが吾は好き
個性豊かな子供のようで

縁日の祭りに集う人々の
マスクが吸い込むイカ焼きの匂い

潮の香の濃くなる夜の突堤(とってい)に
釣りをする人微動だにせず

孫娘タップダンスを始めたと
カタコト鳴らす電話の向こう

音もなくゆったり寄せる磯波に
夜釣りの浮きが波乗りしてる

無人バス

運転手不要となりし無人バス

やがて街なか不気味に走る

難聴のわれを素通りする討論

みんなが笑えば私も笑う

道あればどこでも行ける自転車よ

替わっておくれ私は電車

コロナ禍でシャッターおろした商店街

令和二年のゴーストタウン

まなぶたを閉じて一日(ひとひ)を振り返る
何もなかった特別なことは

タクシーがどこの国でもタクシーと
呼ばれる理由(わけ)を私は知らない

歌浮かぶときに限って手帳なく
箸の袋に書いて帰り来(く)

足許に落ちたくすりのカプセルよ
何処に消えたか煙のように

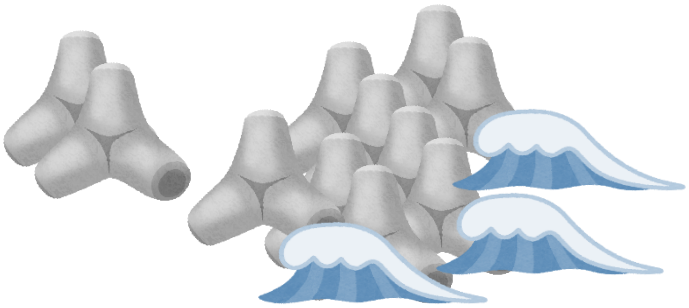
願っても叶わぬことは多けれど
願うことからことは始まる

自動車の急ブレーキを聞くような
春一番がほこり巻き上げ

テトラポッド

滑落のテトラポッドを這い上がる

三メートルをミミズのように



ひたひたと寄せ来る波を受け止める
テトラポッドの音小気味良い

夜釣りする堤防に立つ釣り人の
ヘッドライトに光る太刀魚（たちうお）

戦地より届きし父の手紙には
軍靴かじる日々記されており

妻の癌「説明十日後」と医師は言う
待てば十日の日数（ひかず）の長し

誰にでも吠えかかりたる番犬が
暑さに負けたか顎出し眠る

戦死せる父の墓には母と兄
墓参に行きたしコロナがなくば

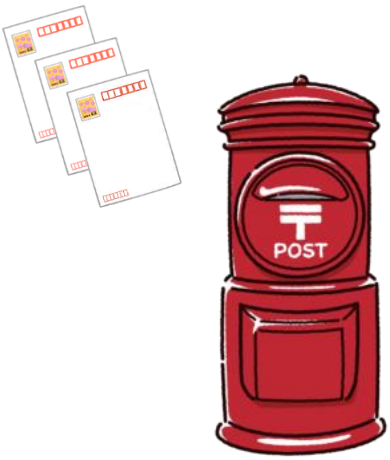
パソコンに毒されているわが指の
手書きの文字が滑って転ぶ

紀の国の山々つらねる和泉嶺（いずみね）の
稜線くっきり夏空を斬る

私はポスト

誰か来てハガキか手紙入れてくれ

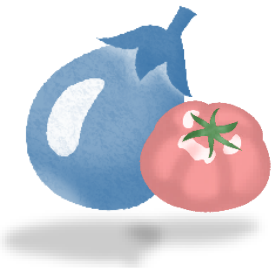
退屈している私はポスト



自販機の大きな音に振り向けば
　汗ふく若衆ニッカボッカで

城堀（しろぼり）の水面（みなも）をおおうハスの葉が
　ひしめき合いてバンザイしてる

農業に転じた友の送り来る
　トマトとナスにほのかな土の香



いつもなら空缶つぶす槌(つち)の音
今日は休みか冬の雨降る

関空の闇夜の窓外見おろせば
宝石箱の神戸が傾(かし)ぐ

空港の闇夜に光る滑走路
ドドンと背に聞くランディングの音

筋肉は引っ張られるから伸びるのさ
自分だけでは伸びられぬから

手術待つ白内障のわが目には
かすみて見ゆる寒椿の花

沈むベネツィア

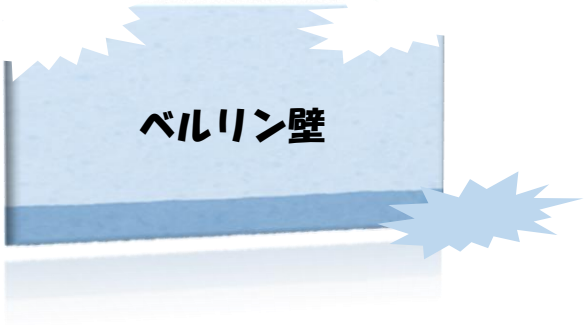
沈みゆくベネツィアの名所サンマルコ

広場に浮かぶビール瓶光る

留学のケンタッキー大学医学部の
夜半の掃除は黒人ばかり

ベルリンの壁が壊れて三十年
新たに築くメキシコの壁

東西にドイツを分けし壁の址
いまや桜の名所となりぬ



銃規制それが出来ないアメリカは
幌馬車はしる西部劇のまま

軍服の若き乙女が銃をもち
バスに乗りくるイスラエルでは

人生の最大の謎は女性だと
ホーキング博士が語ったそうな

モンゴルの国技のような大相撲
がんばれ日本の力士たちよ

海中のウニによく似たアメリカフウの
棘（とげ）のある実が足もと埋める

ふる里の分校ありし公園に
サクラ百本植えられたらし

テルアビブ空港の別れに青年は
「日本は良いね戦争無(な)くて」と

盆栽の松

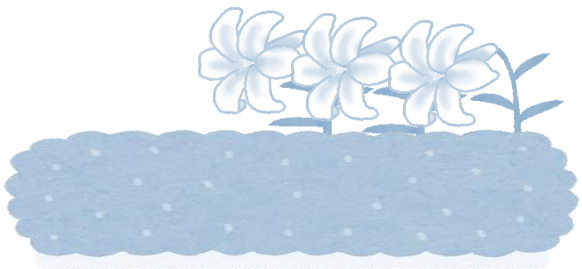
盆栽の松の枝振り堂々と

歌舞伎役者の見得きるごとし

葉かげなる寒椿の花ひとすじの
日差しに真紅の色あたらしき

香水の名前で知りしミモザの木
黄花（きばな）どっさりわれを見下ろす

垣根より道に顔出す百合の花
手を添（そめ）え愛でれば恥ずかしげに揺れ



雨上がりトウモロコシの葉に残る
滴(しずく)を覗けばまあるい葉脈

道端のカラスノエンドウ鞘(さや)黒く
種をはじきて反り返りたり

枯れ落ちた松葉を拾えばどれもこれも
二本が今も連れ添うており

風のない小春日和の砂浜に
小さな影ひきヤドカリの這う

ベランダの洗濯ばさみに吊るされた
白きマスクが空気吸ってる

日溜りにネコがのんびり昼寝する
師走正月どこ吹く風と

散歩の道

この頃は雨滴（うてき）のサイズが大きいと

思えるのだが本当はどうか

雲間より夕日の光線生駒嶺（いこまね）に

束ねて刺さる二月尽日

一段を昇れる喜びまた一段
いつしか着きぬわが家の六階

城濠（しろほり）にうつる天守のシャチホコが
さざ波受けて泳ぎだしたり

木枯らしに吹き上げられしポリ袋
どこへ行くのか寒くはないか

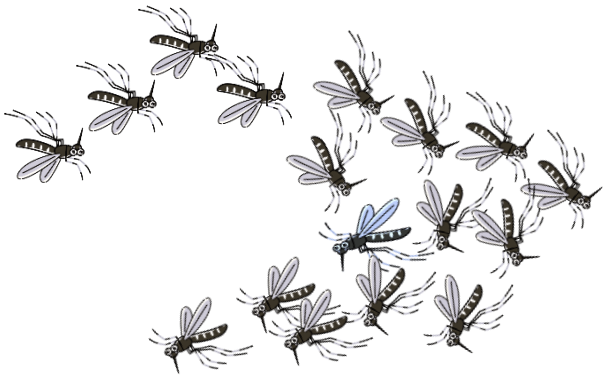
雨上がり今宵の月はくきやかに
生駒の嶺をきわ立たせており

小春日の野原を歩くわが指に
触れるススキのさらさらとして

道端に藪蚊（やぶか）の群れがうず巻いて
行く手をはばむ夕べの散歩

うっそうと茂りしカシの剪定（せんてい）に
広がる青空冬の公園

夏空をさして伸びゆくサルスベリ
幹がひかるよ白雨（はくう）のあとに



ビニールの白きカバーがはずされて
　　ワッと顔出すチシャの葉の青

歩くとは少し止まると書くのだと
　　言われて納得さあ歩こうか

城めぐる散歩の道は左から
　　今日は右から景色が変わる

時代は変わる

AIがやがては人類亡ぼすと

予言して逝くホーキング博士

愛知県知事賞（第36回子規顕彰全国短歌大会）

賞状

坂井修一選
AIがいずれは人類亡ぼすと
予言して逝くホーキング博士

大阪府 金子公宥 殿

あなたは第三十六回子規顕彰
全国短歌大会で頭書の
成績をおさめられましたので
これを賞します

平成三十年十月二十八日

愛知県教育委員会
教育長 藤田 仁

愛知県子規顕彰会館
長 竹田美喜

水を買う時代が来るとは思わざり
西瓜冷やしし古里の井戸

時は過ぎ時代は令和に変われども
桜は咲きぬ変わらず咲きぬ

温暖化まるごと地球を揺さぶるは
可愛い名前のエルニーニョ

高天原(たかまがはら)に始まりたるや天下(あまくだ)り
神代(かみよ)の伝統いまに続けり

戦国の敵味方なく祀(まつ)りたる
金剛峰寺(こんごうぶじ)をわれは訪うたり

「嘘だろう」「本当なんだ」と会話する
久しき友に友の人生

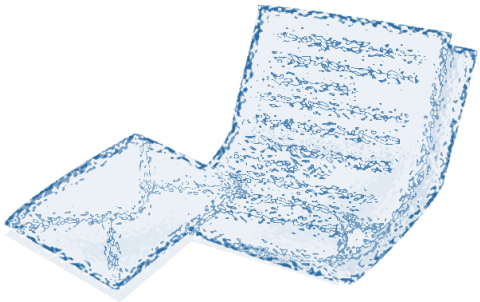
ふるさとの道路はもっと広かった
地球がいつしか縮んだのかな

兵馬俑(へいばよう)の表情あまた凛(りん)として
秦(しん)を支えし誇りがにじむ

愚かな人類

戦友が父の最期（さいご）を知らせたる

手紙が母の遺品に残る



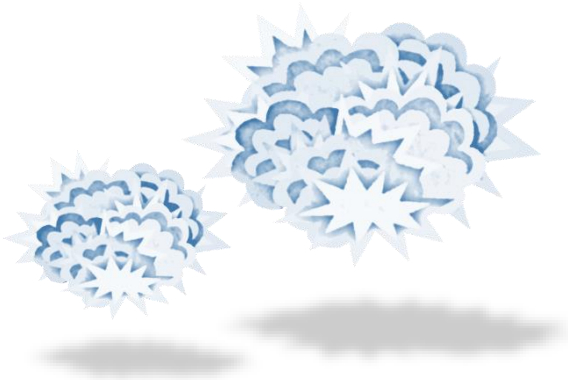
出征時「死んで還れ」と励まされ

戦地に散りし父の思いよ

地球より消えることなき核のごみ
「薄めて海に」は永遠の恥

戦争がそろりそろりとやってくる
誰もがみんな気づかぬうちに

戦火から「最期の晩餐」守ったと
誇らしく語るミラノの友は



戦死せる父の墓前（ぼぜん）にひと山の
銀シャリ捧げ平和を祈る

満潮でベネチアの道は海の中
ゴンドラで行くビルの谷間を

人類は争い好む生物か
戦争たえぬ世界のどこかで

欧州が真ん中にある地図見れば
日本は「極東」パンくずのごと

神仏の宗派を越えしクリスマス
大和の国は平和なるかな

黒焦げのバスの臭いが残りたる
エルサレムにて迎える朝(あした)

未来を生きる

八十路（やそじ）こえそれでも吾は透明の
アクセル踏んで未来を生きる

押さば引け引かば回れと習いたる
柔道の教えそのままに生きる

写真見て頭のてっぺん薄い人
それが君だと言われて驚く

居眠りも欠伸(あくび)も生きの証(あかし)なり
自然体にて老後を生きる

きっぱりと「前」の不快を忘れ去り
これから先の「前」見て生きる

「火の鳥」の続きが小説になるという
手塚治虫は今も不死鳥

濠端(ほりばた)の苔むす土に顔を出す
かよわきタンポポ老いを励ます

新型のコロナウイルス広がりて
クルージング船は孤島となりぬ

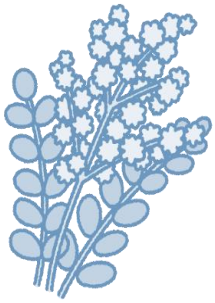
五十肩痛みに耐えて夜明け待つ
時計の針の動きの遅きよ

さまざまな時を紡(つむ)いで五十年
妻の小言も賑わいのうち

ミモザの香

たった今エレベータを降りし女性（ひと）

ミモザの香（かおり）残して去りぬ



人里でヒトを襲いし熊一頭
すべての責(せめ)を背負うがに死す

胃袋で出会いし薬がヤアヤアと
君は脳かい私は下剤

ゆりかもめ急降下して魚とる
銛(もり)をグサリと突き刺すように

難聴のわれに便りの右耳が
あちこち探す人の呼び声

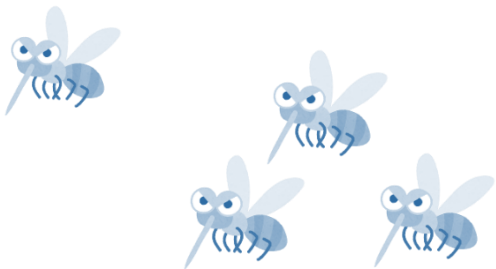
まなぶたを閉じれば浮かぶ原節子
大きな瞳にゆらめくひかり

補聴器を外してみれば一瞬に
静けき森の奥に入りたり

堀端の藪蚊の群れをくぐり抜け
項（うなじ）に残りし一匹を叩く

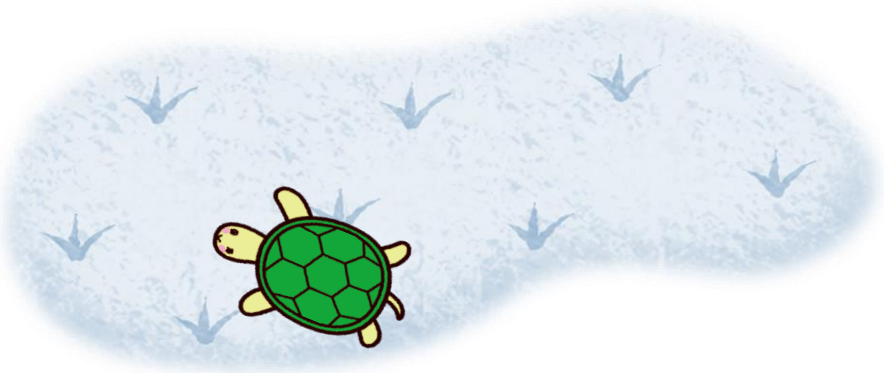
寝つかれぬわが顔かすめ一匹の
蚊が音高く過ぎてゆきたり

シラカシの小さな団栗（どんぐり）プチプチと
踏みつつ歩む冬の公園



電線に群れなしとまる雀たち
見つめる方向なぜかバラバラ

田の間(あい)を流れる堰(せき)の草むらに
誰が捨てたか子亀一匹



植物の心

「オバカサン」言われてる子の愛らしさ

頬(ほお)に飯(めし)つぶ二つもつけて

自販機の釣り銭こぼす老いしわれ
駆けより拾う子の愛らしさ

近頃は珍しくなりし浴衣（ゆかた）の娘
カタコトカタンと足音涼し

幼子（おさなご）のわれを見つめる視線あり
目と目が合えば恥ずかしげに笑み

カタコト　カタン
カタコト　カタン

植物に心はありやと問う子供
答えに窮するラジオの先生

楽しげに無邪気に遊ぶ子供らよ
日本の借金(しゃっきん)背負わせてゴメン

夕暮れに独りで遊ぶ幼子の
ブランコの音幽(かそ)けく聞こゆ

近隣の幼稚園より湧き上がる
歓声今日も老を励ます

自転車の母の背を抱く幼子の
くりくり眼(まなこ)秋の風ふく

堂々と土俵入りする白鵬の
足腰の動き自信に満ちて

終活のとき

短歌詠む日々の楽しさ教えられ

全てを忘れ時の過ぎゆく

あと何年生きられるのか分からぬが

今はとにかくお腹（なか）が空いた

おわりに

齢七十六歳で短歌を始め、詠んだ作品を幾つかの全国短歌大会（左に付記）に投稿し、特選・秀作を含む入選歌が161首に達し、本歌集に収録された。

本歌集を閉じるに当たり、短歌を勧めて頂いた故・林信恵先生、短歌の手解きをして頂いた岸和田市八木地区公民館短歌教室師範の鈴木きよ子先生（結社コスモス）、本歌集の編集者・藤田英和氏（特定非営利活動法人みんなのスポーツ協会最高顧問）他、お世話になった方々に深謝の意を表します。

付　記

短歌を応募した主な全国短歌大会

日本放送協会（NHK）全国短歌大会
日本歌人クラブ全日本短歌大会
現代歌人協会全国短歌大会
子規顕彰全国短歌大会
角川全国短歌大賞

＜作者略歴＞

金子公宥（かねこまさひろ）
昭和 13 年生まれ、静岡県伊豆の国市（韮山）出身
教育学博士（東京大学）
大阪体育大学名誉教授、中国西安体育大学名誉教授
日本バイオメカニクス学会会長
国際体力研究学会（ICPFR）副会長など歴任
叙勲：瑞宝中綬章（2020 年）

編集・装丁 ： 藤田英和（ふじたひでかず）
NPO 法人 みんなのスポーツ協会最高顧問
制　　作 ： 特定非営利活動法人 みんなのスポーツ協会
ホームページ：http://www.npo-minspo.ne

2024.10.10 発行